



TITLE:

<講演>ウェルトウムヌス--様々なアイデンティティを持つローマの神

AUTHOR(S):

ベッティーニ, マウリツィオ

CITATION:

ベッティーニ, マウリツィオ. <講演>ウェルトウムヌス--様々なアイデンティティを持つローマの神. ディアファネース -- 芸術と思想 2014, 1: 19-32

ISSUE DATE:

2014-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/216986>

RIGHT:

【講演】

ウェルトウムヌス

様々なアイデンティティを持つローマの神

シエナ大学教授

マウリツィオ・ベッティーニ

(訳：杉山博昭、田口かおり)

この講演はウェルトウムヌスというローマの神にささげられます。ウェルトウムヌスは、きわめて特異な存在です。というのもこの神は、みずからのアイデンティティを絶え間なく変化させるという特徴を有しており、潜在的に無限の変化を続けるからです。この神はこうした並外れた能力を、次の三つのやり方で示しています。第一に、自身が登場人物を演じる神話の物語において。第二に、自身の名前において。ウェルトウムヌスという語は、「変形する」「変化する」という意味のラテン語の動詞 *vertere* に関係する語です。第三に、ローマ人ならウェルトウムヌスの職務 *officium* と呼ぶであろう、この神に関連づけられる神の領分においてです。それこそまさに変身という領分に他なりません。とはいえ、わたしたちの報告を始めるにあたり、まずこの神にかんする基本的な事実をふまえておくべきでしょう。

プロペルティウスをはじめとするローマの著述家が伝えるには、この神の起源はエトルリアにあるとのことです。彼らによるとウェルトウムヌスの由来はウォルシニイ、すなわち今日のボルセナという、同名の火山湖に面した街にあります。つまりウェルトウムヌスはローマに居を移すにあたって、ウォルシニイという「家＝かまど (*focolari*)」を後にしたというわけです。また紀元前1世紀の偉大な博識家マルクス・テレンティウス・ワロは、ウェルトウムヌスを「エトルリアの主神」とまで評価していました。これらのことから、この神の起源がエトルリアに求められることは疑う余地がありません。いずれにしても、ウェルトウムヌスは新しい祖国であるローマにたどり着き、その結果、その像がウィ

クス・トウスクスというローマのメインストリートに置かれることになりました。当初、ウェルトウムヌスの像はカエデの木を粗く削った模像でしたが、後にはブロンズ像となります。なんとこのブロンズ像を製作したのは神話的な職人マムリウス・ウェトゥリウスであったということです。ちなみにこのウェトゥリウスとは、ローマ第二代の王ヌマ・ポンピリウスが授かったローマ統治者の証、*ancile* と呼ばれる聖なる盾の複製を手がけ、さらにはパラスの神像、つまりトロイ陥落後にローマまで運ばれたというアテネの女神像の複製を製作した人物です。またローマ人が呼ぶところの神の *officium*、すなわちウェルトウムヌスが介入する領分にかんしてわたしたちが理解していることは、この神がとくに、作物や菜園、四季の移り変わり、一般的な意味での「変化」そのもの、とりわけ変身にかかわる技芸と結びつけて考えられる点でしょう。

わたしたちがウェルトウムヌスにかんじて知っている情報は、大きく以上のようにまとめられます。しかしここであきらかにしておく必要があるのは、いま、わたしたちが具体的に誰について、さらに正しくいうと、いったい何について語っているかということです。神話の物語に姿をあらわす登場人物について、でしょうか？ またはこの神をあらわした彫像について、でしょうか？ それともかつてローマ人が *vis numenque* と呼んだ、人間界とのあいだで相互に作用する力を持つ神について、でしょうか？ 実のところわれわれが持つ情報は、いかに限られたものであるとはいえ、偶然にも、この神にかんするこれら三つの様相すべてに関係しているのです。

もちろん、同時に神話の登場人物として、また似像として、さらには聖なる神の力 *vis numenque* としてあらわれるという可能性は、ウェルトウムヌスにのみ認められるわけではありません。むしろそれらは言うまでもなく、ローマや古代の神々のすべてに見られる一般的な現象でした。良く知られているのはユノの例でしょう。まず、神話の物語の登場人物として『アエネイス』のユノがいる一方で、たとえばユノ・レギナ *Iuno regina* の像のように、わたしたちは数え切れないユノの似像も知っています。さらに、ユノ・ルキナは出産するローマ人女性から祈願される対象であり、これは神の力 *vis numenque* の表出の一例と考えられます。古代の神々におけるこれら三つの異なるあらわれ方、もしくは三つの異なる「形象」を区別しておくことはきわめて重要だと思われます。そこでこの区別をウェルトウムヌスにも適用し、わたしたちは先ほど特徴を確認した三つの項目にしたがって、証言を整理していくことにしましょう。ひとつ目の項目は、神話の物語の登場人物であり、まさにローマ人が *fabulae* と呼んだところの「ウェルトウムヌス／寓話 *fabula*」(寓話としてのウェルトウムヌス)です。ふたつ目の項目はウィクス・トウスクスに設置された「ウェルトウムヌス／彫像」(彫像としてのウェルトウムヌス)です。最後の項目が、ローマ人が *vis numenque* と定義した神の力、つまり「ウェルトウムヌス／神」(神としてのウェルトウムヌス)です。では早速、物語の世界から検討を始めることにしましょう。

1. ウェルトウムヌス／寓話 *fabula*

わたしたちはアルバロンガの時代、つまりローマがロムルスとレムスの双子によって築かれたときよりもさらに前の時代に戻ることになります。様々な王によってアルバロンガの王位が継承されてきたあとで、プロカス王の治世がやってきます。さて、オウィディウスは次のように語ります。「すでにして、プロカスがローマの民を支配していた。この王の治世下にポモナも生きていたのだが、ラティウムの森の妖精たちのなかで、彼女ほど園芸の技に巧みなものはいなかったし、果樹を育てることにかけても、彼女がいちばんに熱心だった。」ポモナは稀有なみずからの美貌にもかかわらず、その愛を剪定や接ぎ木、散水に注いだのに対し、ウェヌス〔つまり恋愛〕についてはまったく気かけなかったのです。容易に想像がつくことですが、サテュロスはそんなポモナを手に入れるためにあれこれ手を尽くさないではいられませんし、さらにはファウヌス、シルヴァヌス、プリアプスといった神々も同様にポモナに迫ります。しかしすべては失敗に終わります。このニンフはぐるとめぐらされた囲いのなかでしっかりと守られていて、誰ひとりその菜園に入ることが許されなかったからです。なかでも、ポモナにもっとも恋い焦がれていたのがウェルトウムヌスでした。この神はポモナをくどくため、自身の優れた技芸を駆使するのです。

実はウェルトウムヌスは「生まれながら美貌 (*decus*) にめぐまれたばかりか、どんな姿にでも身を変えることに巧みで、何に変身しろといわれても、いわれたとおりの姿になるのです (*formasque apte fingetur in omnes*)。」「この神は、ほとんど不可能な注文ですらやってのけ、実際に成功も収めるのです。たとえば、ウェルトウムヌスは求愛の手始めに収穫人の外見 (似姿 *imago*) を完璧にまといます。その後、草刈り人、牛追い人、剪定人、兵士、さらに漁師といった人びとの姿になりました。ウェルトウムヌスは、「要するに、いろんな姿に身を変えることで (*per multas ... figuras*)」、ポモナという美しい園芸家が彼の眼差しに提供するスペクタクルを、楽しむ方法を手にしたのです。しかしある日、ウェルトウムヌスは頭に頭巾をし、老女の外観を (*ad simulavit anum*) を装います。さらに、無害な風をよそおってポモナの菜園に押し入り、ポモナを賛美します。この神は彼女の熟練した畑仕事を褒めそやしつつ、愛を説き始めるのです。ウェルトウムヌスがこの美しいニンフにふるった長い弁舌の終わりに、以下のできごとが起きました。

もとの若者にたちもどると (*in invenem rediit*)、老婆の衣装 (*instrumenta*) をかなぐり捨て、彼女の前に姿をあらわした。燦然たる太陽が、邪悪な雲を追ひ払って、隠れもなしに輝やきわたる〔原文ママ〕—— ちょうどそんなさまだった。神は、暴力に訴えることをも辞さなかったが、その必要はなかった。妖精は、神の姿に魅せ

られて、彼の愛に答えるべく、同じ愛の痛みをおぼえたからだ^{*1}。

オウィディウスの物語におけるウェルトウムヌスは、わたしたちに変身する誘惑者としての姿を見せます。つまりこの神は、似姿 *imagines*、外見 *formae*、形姿 *figurae*、衣装 *instrumenta* の交錯というまさに真のカレイドスコープを駆使することで、職種や年齢だけでなく、性差の壁すらも乗り越えたのです。ウェルトウムヌスとポモナの物語を語ることによって、オウィディウスがわたしたちに提示した一連の情報は、したがって、物語の行為主体としての神「ウェルトウムヌス／寓話 *fabula*」にかかわるものです。これを言い換えると次のようになるでしょう。すなわち、そこで叙述されているもろもろの変身は、神々や女神、ニンフたちの棲まう想像上の世界の一部として、ウェルトウムヌスによって成し遂げられているのですが、この想像上の世界のなかには、古代人の宗教性が物語の形式で表現されている、ということです。もちろんこの点に関連して、神話の物語の登場人物が変身の才能を持っているという事実には、何ら驚くべきことはありません。なぜなら、古代のすべての神々はこの才能を持っているからです。とりわけユピテルです。彼はまさに誘惑のために変身を活用するのです。ただ「ウェルトウムヌス／寓話 *fabula*」によって遂行された変身は、非常に特殊な種類に属するように思われます。そしてこのことは、早変わりの物まね師であるこの神が有する変身能力の、もっとも興味深い特徴をなしているといえるのです。オウィディウスがこの神に割り当てた 10 の形象 *figurae* を考えてみましょう。これらはわずかな例に過ぎず、実際にはもっと多くの形象があった可能性も考えられるでしょう。しかし、少なくともここに挙げられた 10 の形象のすべてが、人間と社会の圏域に収まっているのです。ウェルトウムヌスは時に収穫人、草刈り人、牛追い人、剪定人、兵士、漁師、老女、若い男性などになります。しかし、たとえばレダを口説く際には白鳥となり、ダナエに迫る際には黄金の雨となったユピテルとは異なり、わたしたちのこの神は、自然界の要素や動物のアイデンティティを受け持つことはけっしてなかったのです。のちほどわたしたちは、ウェルトウムヌスの変身にかんするこうした特徴的な点について論じていきたいと思います。では次に、「ウェルトウムヌス／寓話 *fabula*」から「ウェルトウムヌス／彫像」へと話題を移しましょう。

2. ウェルトウムヌス／彫像

ここでわたしたちは、ローマのウィクス・トゥスクスに向かいましょう。まさにウェル

.....
^{*1} 訳は以下を参考にした。中村善成「変身物語」岩波文庫、2009 年、287 頁（巻 14『ポモナとウェルトウムヌス』）

トゥムヌスの彫像が、わたしたちにみずからのことを語ってくれるのです。わたしたちがこのような詩的な着想を手にするのも、プロペルティウスのおかげです。この詩人はエレギア詩集の第四巻に収められた素晴らしい詩篇のひとつを、ウェルトゥムヌスに捧げているからです。さて、この神の彫像、つまり先ほど確認した神話的職人マムリウス・ウェトリウスの手になるウェルトゥムヌスの模像は、最初に自身がエトルリアに由来すること、次にウォルシニイからローマへ移動してきたこと、さらにカエデの木を用いた粗削りな模像となり、次にブロンズを用いた完璧な似姿となったことを、わたしたちに語ったばかりです。それに続いて、この像はみずからの名前について話し出すことになります。

この神はわたしたちに名前の語源を三つ示します。このうち最初のふたつはウェルトゥムヌス自身も信じていないものですが、残る三番目の語源は正しいと考えています。いずれにしても、これら三つの解釈がそれぞれラテン語の *vertere*、つまり「変換すること」や「変化すること」という作用を正しく言い当てていることはたしかです。ここでは手短に、この神がウェルトゥムヌスという名の語源にかんして正しいとする、三番目の解釈のみを確認しましょう。

ああ、偽りの名声よ、おまえはわたしにふさわしくない。わたしの名前の意味は別のところにある。おまえはただ、神みずからがおまえに聴かせることだけを信じればよい。ただわたしだけがあらゆる外見へと自分を変形させることができた (*formas uertebar in omnis*)。それ故、父たちの言葉はまさしくこのことから、すなわちあらゆる外見に変形 *verti* できるこの能力から名前を引き出し、わたしに与えたのだ。

したがって *Vert-umnus* とは *vert-(in)-omnis*、すなわち「万物に変形する」神のことと考えて差し支えないでしょう。これがこの神の名前にかんする正しい解釈です。ウェルトゥムヌス自身がこの解釈を「父たちの言葉」、つまりローマ人の言語的感覚のものであるとすることによって、承認しているのです。ウェルトゥムヌスはみずからを、あらゆる一切の形状をとることが可能な、変身をつかさどる神であるとしします。つまるところ「ウェルトゥムヌス／像」はすでにわたしたちが知るこの神の特徴を裏づけているようです。しかしながら、ウェルトゥムヌスのこれらの言葉は、厳密には何を伝えているのでしょうか？

この神が持つ驚くべき能力は、いったい何に起因しているのでしょうか？ この神の像が語る声に、わたしたちはさらに耳を傾けることにしましょう。以下はプロペルティウスからの引用です。

わたしの本性はどんな容貌 (*figuris*) にも適合する。わたしを望むように変えるがいい (*verte*)、わたしはふさわしくなって (*decorus ero*) みせよう。わたしにコス
の衣服をあてがういい、わたしは愛されてやまない娘になってみせよう。わたしが

もしトーガをまえば、いったい誰がわたしを人間、成人の男（*vir*）であることを否定するだろうか？ わたしに鎌を与えて、額に編んだ干し草をつけてみるがいい。おまえは飼葉がわたしの手で刈り取られたと断言するだろう。かつて武器を手にしたときに、わたしはその装備をまもっていても賞賛されたことを覚えている。しかし重たい籠を背負ったときには、わたしは収穫人となったのだ。もし法にかかわる争いの場に立ち会うならばわたしは節度を守るだろうが、もしわたしが王冠を頭上に戴くとすればおまえはわたしがワインを飲んで酔っぱらっていると騒ぐだろう。もしおまえがわたしの頭に髪飾りを載せるなら、わたしはバッコスの容貌を奪ってみせるし、もしわたしの手に撥を握らせるなら、わたしはポエブス〔アポロ〕の容貌すらも奪ってみせよう。肩に網をかければ（*cassibus impositis*）狩猟家だが、もしわたしが鳥もちを手に入れば、わたしはファウヌスのように鳥を生け捕る神となるだろう。ウェルトウムヌスは戦車の御者の外観や（*est etiam aurigae species Vertumnus*）、身軽に馬から馬へと器用に飛び移る曲芸師の外観だって手に入れられるのだ。わたしに釣り竿をあてがうがいい、わたしは大量に魚を釣り上げるだろう。しかしその後すぐにゆったりとしたチュニカを着こんで、良き商人のような作法で悠然と歩いてやろう（*ibo*）。さらにわたしは羊飼いの杖に寄りかかることもできるし、いつでもホコリまみれになってバラの花をカゴで運ぶこともできるのだ。わたしがここで自分に大いなる名声をもたらしたものを、すなわちわたしの手になる菜園の作物を付け加えるとすれば、それはなぜだろう？ それはつまり、わたしを際立たせているのは（*me notat*）、緑に色づくキュウリや豊かに実ったカボチャ、細い草に巻かれたキャベツだからだ。草原で咲くことのない花も、ひとたび、わたしの額のうえに優雅に置かれたならば、そこでは一切しおれることはないのだ。

ここで確認したとおり、「ウェルトウムヌス／彫像」のモノローグにおいて際立つ描写は、先に「ウェルトウムヌス／寓話 *fabula*」が示したそれと、変わるところがありません。わたしたちは次のふたつの描写とあらためて出会ったのです。共通するひとつ目の描写は、菜園や作物の世界にかんするものです。「寓話」においてこれはポモナが愛好する対象と表現されましたが、「彫像」においてこれは直接ウェルトウムヌスのものとされています。ふたつ目の描写は、早変わりの物まね師であるこの神の力です。もちろん今回は、この力が愛の成就のために駆使されることはなかったのですが、共通する力であることはたしかでしょう。「ウェルトウムヌス／彫像」の記述においても、この神がまとうことのできる無数の外見 *formae*、似姿 *imagines*、形姿 *figurae* の強調に終始していることに、疑う余地はありません。要するに、これはこの神の名前が、そこから直接派生することとなった *vertere* の次元、すなわち変身にかんする記述なのです。このように言うと、すぐにわたしたちは以下の疑問を口にせずにはいられません。つまり、ウェルトウムヌスが授かった

変身能力は、別の古代の神々、たとえばテティスやプロテウスといった海の神々が特別に有する能力と同じなのでしょうか？ それとも、わたしたちは何かしら別のものを検討してきたのでしょうか？ ここでわたしたちは、プロテウスのもっとも有名な事例を確認したいと思います。

ホメロスはプロテウスについて「海の長老」であり、この神はみずからの姿を「地上で動く万物、水、さらに美しくも燃えさかる炎」に変える力を持っていたと語ります。実際、帰り道を問いただそうとしていたメネラウスとその部下たちに捕らえられた際、まさにプロテウスは「まずふさふさとしたたてがみを持ったライオンになり、次に蛇になり、ヒョウになり、巨大なイノシシになり、さらには流れる水となり、高く茂った樹木になった」わけです。したがってこの海の老人は、こういって良ければ「自然にかかわる」変身を駆使する神というわけです。つまり、動物から植物にいたるほど多岐にわたる外見 *formae* を手に入れたプロテウスは、みずからを、水や火といった宇宙を構成する、単純な元素に変える力さえをも有していたということです。それとは対照的に、「ウェルトウムヌス／彫像」の声をとおしてわたしたちに姿を見せるウェルトウムヌスは、あらためて「社会にかかわる」変身を駆使する神であると理解されます。すなわち、この神が身にまとうすべての容姿が含まれるのは、人間の次元の内部であり、さらに言えば、市民社会 *civitas* を枠づけている範囲の内側なのです。コス衣服をまとった娘、トーガを着る市民、草刈り人、兵士、馬に乗った曲芸師、商人、園芸家などというように、共同体内における役割の複数性を横断することによって、「万物に変化する」神の変身 *vertere* が実現されるのです。この神はまさしく、複数の市民的アイデンティティを持った処世術の名手なのです。「ウェルトウムヌス／彫像」が語ることは、「ウェルトウムヌス／*fabula* 寓話」で実際に起きたことと何ら変わるところはありません。わたしたちがすでに確認したとおり、オウィディウスが語った物語の登場人物であるこの神は、ポモナを口説くにあたって、ユピテルのように白鳥や黄金の雨にはなりません。ウェルトウムヌスは動物の外見、もしくはより広く自然界の外見 *formae* をとることはありません。この神は時に収穫人や草刈り人、兵士、老人になることはありますが、その変身の範囲が人間や社会に根ざしたアイデンティティの範囲を超えることはないのです。

こうしたアイデンティティの複数性のもと、「ウェルトウムヌス／彫像」には、自身を別の神にまで変形させる能力がそなわっています。その対象がポエ布斯（アポロ）でありバックスです。このふたりの神は伝統的に、頭の髪飾りや手にした撥によって自分を特徴づけてきました。ポイボスとバックスのそうした表象が、造形的か物語的かという点は措くとしましょう。いずれにしてもウェルトウムヌスは、固有の表象を持つこれらふたつの神の姿を、はっきりと手に入れるのです。要するに、わたしたちの前にあらわれたウェルトウムヌスは、プロテウスとはかけ離れた存在なのですが、それとは対照的にオウィディウスが『変身物語』に記したモルペウスとは、近い存在であると言えるでしょう。オウィ

ディウスはケユクスの死を物語る際に、夫の不幸を妻であるアルキュオネに知らせるべく、彼女の夢にモルペウスが遣わされる場面を描きました。人間の夢のなかに入るモルペウスは、個々の人間の顔かたちや歩き方、声にいたるまでをその時々模倣する神のひとりです。それによって彼は、それらの個人＝ペルソナをあたかも存在するように演じるのです。ウェルトウムヌスと異なるのは、夢のなかのモルペウスはペルソナの正確なアイデンティティや名前を用いて「個人」を演じることはあっても、「社会的役割」を演じることはないという点でしょう。これをオウィディウスによって語られたエピソードに即していうと、モルペウスはたんなる「娘」ではなく「アルキュオネという娘」を演じたのだと考えられます。モルペウスは人間を演じることで固有名詞の領域を引き受けるのだとすれば、ウェルトウムヌスが引き受けるのは一般名詞の領域なのです。

3. ウェルトウムヌス／神 *dio*

ここで、「ウェルトウムヌス／彫像」から離れ、「ウェルトウムヌス／神」の問題へと、目を転じてみることにしましょう。すなわち、ローマ人たちが言うところの神の力 (*vis numenque*) というテーマを、じかに検証するのです。その結果、わたしたちは、ウェルトウムヌスが彫像や寓話という形態において示した社会的役割の多重性が、ここ、神の力の形態においても健在である、という事実を知ることになります。

ホラティウスの著した風刺詩には、奴隷ダーヴスがローマ王プリスクスを「気まぐれに生きた (*vixit inaequalis*)」人物として描写するくだりが幾つかあります。ここで興味深いのは、プリスクスの「気まぐれ」がどのようなもので、いかなる動機によるものなのかという点です。以下、ホラティウスからの引用です。

あのプリスクスは、人の眼につくよう (*notatus*) 三つも指輪を嵌め、
そうかと思うと、ある時はその左手に指輪がない。
落ち着きのない暮らし方で、議員の印の帯 (*clavus*) を
毎日、何度も取り外し、
大邸宅 (*aedibus ex magnis*) からあたふたと、まともな普通の人間なら
赤面せずにはいられないような所に出掛けます。
時にはローマで間男 (*moechus*) を演じてみたり、
あのアテネの賢者の真似をしたりする。
どうやら彼は気まぐれのウェルトウムヌスの導きで

生まれて来たに違いない (*Vertumnis quotquot sunt natus iniquis*) *2。

ダーヴスによれば、プリスクスの移り気な気質は、彼が生まれた時に、彼に好意的ではなかったウェルトウムヌスの敵意を刻印された事実によって由来しているということになります。ウェルトウムヌスは、プリスクスに好意的ではなかったのです。したがって、わたしたちがいま目の前にしている登場人物は、ローマの宗教における「ウェルトウムヌス／神」、そしてその神の力 (*vis numenque*) ということになります。しかし、この話を進める前に、わたしたちはウェルトウムヌスに付随する複数性という問題に注目しておかなくてはなりません。単数形 (*Vertumnus*) ではなく 複数形 (*Vertumni*) のウェルトウムヌスについて語るとき、この神がはからずも身に帯びた「複数の」性質は、わたしたちをいささか狼狽させることでしょう。わたしたちがここで論じている神が、まったく同じ名を名乗る複数の神性にとって代わられるなどということが、どうして可能になるのでしょうか？ 実際のところ、わたしたちが目の当たりにしているのは、神が単複どちらのかたちでも表出可能であるという、ローマの宗教にすべからず共通するところの現象です。すなわち、家族や道の守護神ラル (*Lar*) はラレス (*Lares*) と対であり、ファウヌス、サトゥルヌス、プリアプス、ヤヌス、パン、シレヌスなどの総称セーモー (*Semo*) はセモネス (*Semones*) と同義です。荒地と森の神シルウァヌス (*Silvanus*) はシルヴァーニ (*Silvani*) であり、森と農耕の神ファウヌス (*Faunus*) はファウニ (*Fauni*) であり、水の精カルメンティス (*Carmentis*) もしくはカルメンタ (*Carmenta*) はカルメンテス (*Carmentes*) であり、泉のニンフカメーナ (*Camena*) はカメーナエ (*Camenae*) であり、豊穡の女神ケレス (*Ceres*) はケレレス (*Cereres*) であり、ウェヌス (*Venus*) はウェネレス (*Veneres*) であり、女性の守護神ユノ (*Iuno*) はユノネス (*Iunones*) なのです。ジャン＝ピエール・ヴェルナンがギリシアの宗教について述べていることは、ローマの宗教の在り方にもそのまま当てはまります。ヴェルナンいわく「このパラドックス、すなわち神が単数であるか複数であるかに頓着しない態度が発生する原因はただひとつ、ひとりの神がその〈力〉をふるうにあたって幾つもの外観と様態をとるからである。神という存在に個々の形態があるからではない」ということになります。神の力すなわち *vis numenque* であるかぎりにおいて、古代の神はひとつの「ペルソナ」ではないので、単体であろうと多数であろうとたいした違いは生じません。「多神教 (*politeismo*)」の神は、名詞や動詞の活用と同じように、単数形と複数形の区別にかかわらず、柔軟に変化することができるのです。神の個々のアイデンティティは、神の *officium* すなわち活動圏域と同様、厳密に定義されることがありません。では、ここまで整理したところで、ホラティウスのテキストへと戻ること

.....
*2 訳は以下を参考にした。鈴木一郎訳「ホラティウス全集」玉川大学出版部、2001年、174-175頁(『風刺詩』2・7自由論)

しましょう。

よく知られているように、ローマ人は、人間の運命とは、神々の機嫌の善し悪しによって誕生時に決定されるものと信じていました。したがって、こうした状況において、もし誕生時に、力ある神（*vis numenque*）としてのウェルトウムヌスが好意的でない顔をのぞかせれば、赤ん坊の性格はその影響を受けます。そしてこの理由ゆえに、移り気な気質（*inaequalitas*）つまりは不安定さに支配された人間になっていくのです。ここでわたしたちをただちに驚かせるのは次の事実です。すなわち、この「ウェルトウムヌスの」性格とは、とりわけ社会的アイデンティティにおいて、まさしく変わりやすさとして具体化されるものなのです。言い換えれば、わたしたちの議論はここで、ホラティウスやプロペルティウスが描写したウェルトウムヌスの変身が起こる場、すなわち多種多様な市民のアイデンティティが共存する領域へと、ふたたび舞い戻ることになります。「好意的でないすべてのウェルトウムヌスとともに」この世に生を受けるということは、市民社会（*civitas*）の内側で変化し、変身し、常に「他の誰か」であり続けることを余儀なくされるということです。あるいは安定した社会的アイデンティティを欠いた存在となること、と端的に言い換えることもできるでしょう。こうして考えてみると、先ほど引用したプリスクスもまた、際立って対照的であるばかりか、両極とさえいえるような複数の役柄を好んで演じていたようにみえます。まず、指輪の問題から考察していきましょう。

ローマにおいて、指輪は、複雑でいくんだ象徴的なコードをもつ装飾品でした。指輪の材料となる金属やその純度、デザインによって、その所有者が裕福であるかどうかばかりか、社会的身分やどの階級に属しているかまでもが明らかになるのです。伝統的に、ローマ人は以下のようなルールのもとで指輪を身につけていたようです。すなわち、一般市民がシンプルな鉄製の指輪を装着する一方、元老院議員や騎士は金の指輪をひとつ身につけることを許されます。大神官法典の専門家であったアティウス・カピトーは、奴隷達は「指輪を身につける権利（*ius*）を持たない」と断じています。カピトーの言葉を読めば、なぜプリニウスが「もはや奴隷たちまでもがみずからの鉄製の指輪を金で飾っている」事態を不適切な行為とみなしていたのかの説明がつかます。つまりプリスクスは、指輪の使用をめぐる揺らぎを通し、みずからが属する社会的身分をあいまいで多義的なものとして示したわけです。指輪の有無によって、プリスクスは時に裕福な領主となり、別の時には奴隷にすら身を落とし、あるいはそれ以下の身分にも属することができました。同じことが、もうひとつの社会的身分の典型的な指標である家屋についてもいえます。プリスクスは、自身の大きな邸宅を放棄して、卑しい解放奴隷にすらふさわしくないようなみすぼらしいあばら屋に身を潜めることで、市民社会（*civitas*）における自分の位置づけを乱暴にも改變します。さらにあからさまな方法としては、着用しているチュニカを飾る帯（*clavus*）を変えることにより、元老院議員の階層（*latus clavus*）と騎士の階層（*angustus clavus*）とのあいだを行き来するというものがあります。実際のところ、かつて議員と騎士の身分

を区別していたのは、帯でした。前者が赤く幅の広い帯をしめる権利を有していたのに対し、後者は小さめの帯をしめなくてはならなかったのです。しかしそれでもまだ足りないとでも言うかのように、プリスクスは、娯楽の都ローマに生きる自由民としての自らの立場を、知性の都アテネというまさしく正反対の場に生きるそれと交代させてしまいます。社会的変身をつかさどる神ウェルトウムヌスの敵意は、かくして、もっともかけはなれた複数の市民的アイデンティティを担うことをプリスクスに強いました。端的にいうなら、「ウェルトウムヌス／神」とは明らかに、「社会的な」不安定さと変わりやすさという性質をつかさどる神なのです。つまりウェルトウムヌスの活動圏域は、市民社会（*civitas*）と、その社会を動かす多種多様な人々の役割によって成り立っているのです。

さて、せっかくこうして「ウェルトウムヌス／神」について話をしているわけですから、神の領分（*officium*）のもうひとつの側面、すなわち、神の力（*vis numenque*）が発揮される活動圏域という話題にも光をあててみましょう。それは、変化（*vertere*）の領域にかかわる属性であり、ある意味では同時に不安定さの領域にもかかわるものです。ですが、ここでは、出来事の成り行きを特徴づけうる性質としての「変わりやすさ」に着目しましょう。実際、ある出来事が「良い」スタートをきったのに「悪い」結末を迎えたり、あるいはその逆が起きるなど、一連の出来事のうちに徹底的な転換がみとめられるとき、そこにはウェルトウムヌスが一枚噛んでいると信じられてきました。神が持つ権限のうちには、ローマ人たちが言うところの「好転する *bene vertere*」「悪転する *male vertere*」力も数え上げられていたのです。これらの表現は、感嘆文の形をとった祈念の言葉として、頻繁に使用されていました。このことを語っているのは、古代末期に、テレンティウスの喜劇の重要な注釈本を著した文法学者、アエリウス・ドナトゥスです。わたしたちは、喜劇「兄弟（*Adelphoe*）」中の一場面、子供の誕生が告げられる瞬間に立ちあっているとところだと想像してください。すぐさま、老人ミキオが「うまく事が運びますよう *di bene vertant* *³！」と叫びます。この場面についてドナトゥスは以下のように述べています。

わたしたちは、みずからが自発的に行うすべての事柄において、「神がそれを良い方向へ向けますように＝うまくいきますように（*di bene vertant*）」と唱えるのが常である。なぜなら、人々はしばしば、望んだように物事がはこばないという事態に見舞われるからだ。古代の人々は、幸・不幸いずれかの方向（*vertentium semet in utramque partem*）へと事を転じる力を、ウェルトウムヌスの特権であると考えていた。

.....
* 3 訳注：鈴木一郎訳『古代ローマ喜劇全集』東京大学出版界、1979年、730頁（『兄弟』第五幕第二場）での訳は「そいつはいい」。

つまりドナトゥスによれば、ローマ人たちが誰かに（あるいは自分に対しても）幸運や不運を祈り、大声で「うまくいきますように (*di bene vertant*)」あるいは「しくじってしまいますように (*di male vertant*)」などと叫ぶのは、実のところウェルトウムヌス神への呼びかけであったというわけです。呼びかけに応えたウェルトウムヌスが、出来事の行く末をいずれかの方法に「転じてくれる (*vertere*)」と信じていたのです。この観点からすれば、ウェルトウムヌスはフェリキタスやボヌス・エウエントゥスといった神々たちとちがって、人間の手によって始められた物事を「良い結末へと導く」存在ではないようにみえます。ウェルトウムヌスは、必ずしもより良い方向へと事を転じてくれるわけではありませぬ。ただ転じる、それだけです。ウェルトウムヌスの領分は、良い方向への変化 (*bene vertere*) ではなく、変化 (*vertere*) 一般によって成り立っています。つまりこの神が表象しているのは、どちらかといえば、さまざまな出来事の流れにおける変わりやすさや不安定さの方なのです。

これまで見てきたように、ウェルトウムヌス神は、あるひとつのローマの神が顕われる三つの次元が、いかに魅惑的なやり方で互いに交差しえるかを示してくれました。その三つの次元とは、神話の登場人物としての、その神の似像としての、そしてその神の力 (*vis numenque*) としてのウェルトウムヌスです。さて、講演の最後に、この神が引き起こす変身の社会的側面について考えてみましょう。つまり、変化というウェルトウムヌス的アイデンティティが、共同体に存在する異なる「役柄」をその都度引き受けてゆくという事態について、簡単に触れておきたいと思うのです。

4. ふさわしい (*decere*) 神、あるいは「あるべき」姿の神

先ほども引用したように、プロペルティウスは、「ウェルトウムヌス／像」にこんなことを語らせていました。「いかようにも (*figuris*) わたしを変えてみるがいい (*verte*)、わたしは『ふさわしい姿』になってみせよう (*decorus ero*)。わたしにコスの衣服をあてがってみせるがいい、わたしは愛されてやまない娘になってみせるだろう。もしわたしがトーガをたとえば、いったい誰がわたしを人間(成人の男)ではないと見破れるだろうか？」ウェルトウムヌスの彫像はさらにこう続けます、つまり彼の本性は、神の彫像を受け継ぎあらゆる姿形をとるのにふさわしい (*opportuna*) ものである、と。同様のことが、ウェルトウムヌスが戦士になろうとした時にも起こりました。「わたしはかつて武器を身につけていた」と、ウェルトウムヌスは語ります。「武装した姿であっても、わたしは褒め讃えられた (*laudabar*)」、と。初物として彼の御前に捧げられた「花々」までもが、ウェルトウムヌスの優美さ (*decenter*) のあらわれです。ここからは、いかなるアイデンティティを持つとも、ウェルトウムヌスは常に「あるべき姿」として顕われる神である、とするプロ

ペルティウスの主張が見てとれるでしょう。ウェルトウムヌスが活動する圏域とは、いわば適正さ、優美さ (*decorus, decenter*) の圏域なのです。

詩人ティブルスもまた、プロペルティウスと同様の考えを持っていました。この詩人にかんしては、実名で呼ぶよりも、その詩の全集 (*corpus*) におさめられている、ある叙情詩の作者、と紹介したほうがいいかもしれません。このエレギアで詠われるのは、足を運ぶところにはすべからく適正さ (*decor*) と優美さがついてまわったというかの有名な娘、スルピキアです。詩人は詠います。髪をほどいていれば流れ落ちる髪が良く似合い、結いあげていればそれはそれで愛らしい。テュロス製の衣装 (*palla*) に身を包み裾を長く引けば男たちは燃え上がり、純白の衣服を羽織っている姿もまた、彼らを恋い焦がれさせる、と。そのように詠われたあとで、わたしたちにとって興味深い一節が続きます。「不滅のオリュンポス山にて幸福に憩うウェルトウムヌスもまた、スルピキア同様、無数の装飾品 (*ornatus*) を身に付けており、そのすべてがよく似合って優美である (*decenter habet*)」。ようするに、ティブルスにとっても、ウェルトウムヌスを指す暗号は「あるべき姿で存在するもの」であったということになります。一步踏み出すごとに優美さ (*decor*) が香ったというかのスルピキアのごとく、ウェルトウムヌスは美しく (*decorus*)、たとえどんな衣服を纏おうとも優雅 (*decenter*) なのです。さて、ここまでくれば、わたしたちはふたたび「ウェルトウムヌス／寓話 *fabula*」の話題へとたちもどることができます。『変身物語』の著者オウィディウスもまた、常に「あるべき姿」で顕われるウェルトウムヌスの能力を強調し、以下のような描写を行っています。

生まれながら美貌 (*decus*) にめぐまれているばかりか、どんな姿にでも身を変えることに巧みで、何に変身しろといわれても、いわれたとおりの (*apte*) 姿になるでしょう*⁴。

オウィディウスも、ウェルトウムヌスの活動圏域は、優美さ (*decus*) の圏域であるとしています。神は無数の形状 (*formae*) をとり、その変身はその都度、適切かつ順当です。ウェルトウムヌスの変身は、実のところ、ここまでわたしたちが考察対象としてきた社会的空間の内部に位置づけられるだけではないのです。ローマの変化 (*vertere*) をつかさどる神ウェルトウムヌスは、市民社会 (*civitas*) を活性化する多様なアイデンティティの目録を提供しています。そればかりか、優美さ (*decus*) すなわち「あるべき姿」という特殊な暗号を担い、それによって市民の様々な役柄を個々に演じ分ける存在でもあるのです。ようするに、ウェルトウムヌスの変化 (*vertere*) とは、ずばぬけた変身能力のこと

.....
*⁴ 訳は以下を参考にした。中村善成「変身物語」岩波文庫、2009年、287頁（巻14『ボモナとウェルトウムヌス』）

であり、この力がもたらすのは転覆や不安定、あるいは気まぐれのイメージではなく、むしろ秩序のイメージなのです。少女のアイデンティティから成人の男(*vir*)のアイデンティティにいたるまで、神はいずれにせよ常に優美(*decorus*)なものとして顕われます。ウェルトウムヌスが適切(*aptus*)で順当(*opportunos*)なやり方でさまざまな外見(*formae*)を帯びることにより、そのペルソナの周囲で活動するすべてのものもまた、優美さもしくはふさわしいもの(*decenter*)の圏域におかれることになるのです。あるアイデンティティから別のアイデンティティへ、ある役割から別の役割へと移り変わりながら、ウェルトウムヌスは常に自身の居場所を見失うことはありません。ウェルトウムヌスの変身は波乱どころか、むしろすべてが「あるべき姿」にあるという感覚をもたらします。かなり逆説的ではありますが、つまるところわたしたちが目前にしている変身の神とは、アイデンティティの転覆ではなく、むしろアイデンティティを承認する傾向をより強く帯びた変身の神である、といえるでしょう。何故、ホラティウスが、プリスクスの気まぐれ(*inaequalitas*)な性格を、彼の誕生時にウェルトウムヌスが好意的でなかった(*iniqui*)ことに理由づけたのか、そのわけはここにあります。プリスクスがのべつまくなしに自身の社会的立場を変え続けた有り様は、無秩序で、不適當で、無分別であり、「あるべき姿」という神の暗号からはかけ離れていたからです。かくして、ウェルトウムヌスの好意的でない(*iniquus*)態度によって、移り気な(*inaequalis*)プリスクスはたしかにさまざまなアイデンティティを帯びることになりましたが、それは、ウェルトウムヌスの変身の特徴づける適正さ(*decorum*)、優美さ(*decere*)、ふさわしさ(*decenter*)とはなんの関係もありません。つまるところ、プリスクスとは、ウェルトウムヌスの粗悪な複製にすぎないのです。

(2012年3月12日、京都大学大学院人間・環境学研究科にて講演)